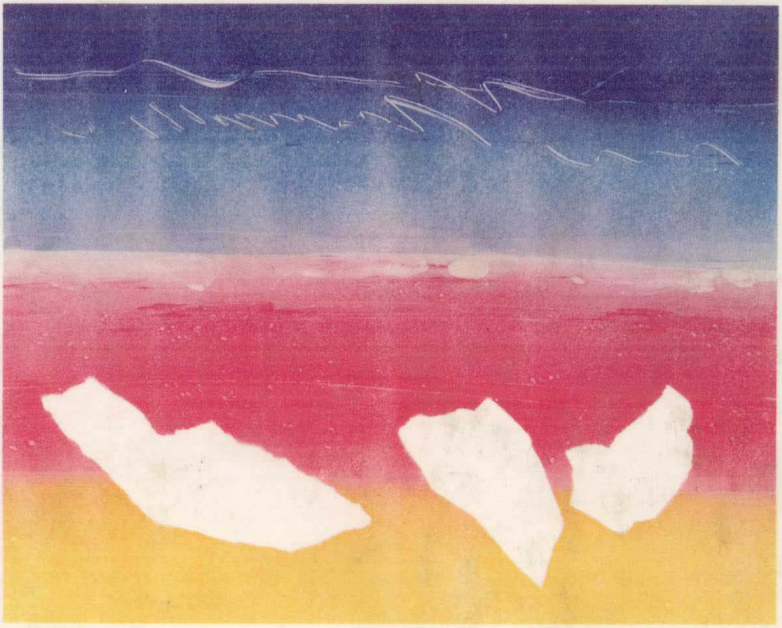
私の海外障害者施設レポート

ハッピードア・ワークショップ

福井昭子



創林社

私の海外障害者施設レポート

ハッピードア・ワークショップ

福井昭子

創林社

福井　昭子（ふくい・あきこ）

1945年3月12日，東京代々木八幡山に生まれる。麹町学園卒業。清泉女子大学に学ぶ。1966年渡米。1967年渡米，ウインスロップ大学に留学。
ブリガムヤング大学卒業。教育・歴史専攻。
マサチューセッツ州立フイッチバーグ大学大学院卒業。特殊教育学専攻。
ハワイ大学大学院卒業。教育管理学専攻。
英国 I.A.P.M. ロンドンセンター卒業。モンテッソーリ教育メソッド教師資格取得。
1979年帰国。1980年，兵庫県加古川市に「ハッピードア・ワークショップ」オープン。
連絡先＝兵庫県加古川市寺家町 342-4
（ハッピードア・ワークショップ）
住所＝東京都中央区日本橋蛎殻町 1-27-8

ハッピードア・ワークショップ

一九八一年四月二〇日第一刷発行

定価一一〇〇円

著者　福井昭子
発行者　宮西忠正
発行所　(株)創林社
〒101 東京都千代田区三崎町二の一二の二
電話東京二六五―八〇七七
振替東京〇―二六五四五
須藤印刷　昇栄社

© AKIKO FUKUI

0095-0127-4281

目次

オーストラリア、キュー病院――青春の旅立ち　七
パインランドの黒人障害児たち――捨てられた街　二〇
ローズウッド州立病院――眠っている足　三三
シュライナーズ病院――太平洋諸島の肢体不自由児たち　四七

マンソン州立病院——てんかん症の若者たち　五四
フイッチバーグ大学——特殊教育と主婦学生たち　七三
ウィーン便り——職業訓練ワークショップ　九三
ノーザンプトン州立病院——日本人女性の患者　一〇三
＊
トイレ掃除奮戦記——清潔という名の祝福　一一七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シイラの思い出——七面鳥のないクリスマス・ディナー　一三五
＊
ハッピードア・ワークショップと私——作業日誌　一三一
ハッピードア・ワークショップへのご招待　一四七
あとがき　一五一

装画＝白井昭子

福井昭子著

ハッピードア・ワークショップ

——私の海外障害者施設レポート

創林社刊

オーストラリア、キュー病院

——青春の旅立ち

The die is cast！〃骰子は投げられた〃ついに骰子は投げられる日がきた。

一九六六年十一月十日午前六時、私はオランダ客船チワンギ号一万三千トンの船上でこう呟いていた。いま、うすもやのたちこめる横浜港からオーストラリアに向けて出発しようとしている。

もう後戻りなんかする気はけっしてないのに、いざ日本を離れると思えば、一抹の淋しさが、私の胸でキューンと痛く感じられる……。

私は、この日の来るのを何年も待ちつづけ、海の彼方の未知の世界で青春を過ごすことを夢見てきた。それが現実化するというのに、感傷気分は無用と、私自身にいいきかせなければならなかった。

目的地はメルボルン。途中、香港、ブリスベーン、シドニーの各港に停泊する三十日間の船旅。私のメルボルンでの滞在予定は半年だ。

＊

一九六三年、オーストラリア人のアシュバーナ夫人と出会った。彼女は、日本、豪州の友好増進につくし、勲六等宝冠章を日本政府から受章した親日家。夫人の父親は大の日本びいきで、日本海軍がメルボルンに入港するたびに、自宅に招いて歓迎パーティを催した。この習慣を夫人が引き継いでいるという内容の記事が新聞にのっていた。私はオーストラリアという新しい国に強い関心を持っていた。国民の福祉が発達している豊かな国、南方志向の私には魅力のある国であった。

私は夫人の滞在する帝国ホテルに電話を入れ面会を求めると、彼女は快く応じ、すぐに会いにいらっしゃいといわれた。灰色がかった大きな目の美しい夫人は、七十二歳とは思えぬほどに若く見えた。

夫人は帰国後も便りを下さった。私たちは文通でお互いの家族のことも書きあった。私は、夫人の長男が、精神科医であることを知った。そしてドクター・アシュバーナは、かつてビィクトリア州立精神病院キュー病院の院長であり、現在小児病院の院長をされ、障害者教育に強い関心を持っておられることなども書いてあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私は、清泉在学中から、留学目的で渡米することを志していた。アシュバーナ夫人は便りの中で常に、メルボルンに来るようにといわれ、私は夫人の言葉に、海外への第一歩を踏みだす可能性を見いだしていた。

アメリカ・南カロライナ州立のウインスロップ大学への留学が清泉在学中に決まり、私は、豪州経由米国行きの計画を実現させることが出来た。

豪州滞在の目的の主な三つは、

第一、アシュバーナ博士の紹介で、キュー病院の幼児病棟でボランティア・ワークをする。

第二、米国留学の準備として、語学力を上達させること。

第三、多くの人々との出会いを求めること。

であった。

＊

一九六五年十一月三日、私は、NHKが招いた精神薄弱児教育における世界的権威、イリノイ大学教授のカーク夫妻に出会った。

私は、カーク夫人の講演会で、障害児を持つ親の共通した悩みは、子どもたちの教育はもとより、学校卒業後に歩む道であることを知った。成人ことに障害者たちが住む地域社

会に働く職場が少いこと、彼らの多くが自宅放置されてしまうか、施設に収容される状況にある事実を私ははじめて知る。

職業訓練期間が制限された授産所はあっても、その数は少く、そこは永久的に働ける職場ではない。

特殊学級、福祉施設を出た後の障害者たちの歩む限定された道が、私にはひどく不自然に思われた。障害があろうとなかろうと、一つの社会に共に共存し、助け合って生きることが、人間にとって自然であると、私は当然のように思っていたからだ。

現状問題として、障害者の人生航路がいかに社会から離れて、閉じ込められた道であるかがわかった。

私は、障害者教育福祉にかかわりたいと思った。

カーク夫人との出会いは、私の米国留学を動機づけてくれた。そして、私の生涯の道を間接的に開いた人であった。

＊

十二月十日、メルボルンに到着してから一週間後、アシュバーナ博士の紹介で、私はキュー病院の小児病棟で、ボランティア・ワークをはじめた。

私はこの病院で働くはじめての日本人だった。ここは、欧州、米国、アジアの各国から

の人々が働く、国際色の豊かな職場である。

キュー病院は、ビィクトリア州政府が経営する随一の精神病院として一八八四年に設立、九十エーカーの敷地内にある三十一の病棟には、幼児から九十歳近い年のさまざまな障害を持つ人々が住んでいる。

私がボランティアをすることになったのは children's cottage と呼ばれる小児病院の建物の中の二十四ワード（病棟）である。この病棟は一軒の独立した建物で、このワードに六歳から九歳までの男女五十人が住んでいる。

子どもたちはみんな障害児――肢体不自由、言語障害を伴う重複障害児と蒙古症の子どもが多い。軽度の精神薄弱児たちが元気にワード内を走りまわっている中にまじって、かなり重症の子どもたちが床をはいずっていた。しかし、ひとりひとりの子どもたちの表情には、いっぱいの明るさが見える。舌たらずの口調で一生懸命に私に話しかける子、私の体に飛びつく子、みんなの声には微笑がある。私はこの子どもたちと共に過ごすことがどんなに楽しいかと思うと、嬉しくなってしまった。

メルボルンの私の住まいであるアシュバーナ夫人の邸宅のホーソン地区からキュー病院まで、徒歩三十分。電車もバスの便もないので歩いて毎日通った。

病院はキュージャンクションと呼ばれる交差点から急な坂道を登りつめた所にある。病

院の入口には「キュー州立病院」の名称を記した黒い大きな鉄門がある。その門をくぐり抜けると芝生の緑が広がっている。そして幾つもの小径が、それぞれのワードの玄関へとつづく。

二十四ワードまでは、門から一直線の道。毎朝、私がこの小径を歩いてくると、いつも最初に私を見つけるのがピーターだった。

「キーコ、キーコ！」

のどがはりさけんばかりの声を出す。私が手をふり、返事をするまで、私の名を呼びつづける。ピーターの大声で、庭で遊んでいた子どもたちも「キーコ、キーコ」ととびはねながら私を呼ぶ。

ピーターのほかに私の名前を呼べる子どもはほんの数人。言語障害児が多くいた。難聴が原因している。

私の仕事は午前九時にはじまる。

毎朝、まっさきにする仕事は、子どもたちのベッドメーキング。五十のベッドを二人の看護婦と一緒にするのだが、終るまで一時間は充分にかかる。その後は床掃除を手伝うこともあるが、ワードの外にある遊び場で、子どもたちと遊ぶことが多かった。いつのまにか、毎日の散歩に子どもたちを連れて歩くのが私の仕事になっていた。

二十人ほどの子どもたちが、それぞれパートナーの手をつないで、広い病院のグラウンドを歩くのだ。

ある日、ジョニーが、パートナーのクレラの手を振りきって、どこかにすっとんでいってしまった。私の気づかぬうちに。

ジョニーは九歳の蒙古症の男子。愛くるしい大きな青い瞳、ぽってり太った明るい子。言葉を文にして話せないジョニー、いつも単語だけを並べて会話をする。

クレラは三歳の蒙古症の女児。おしゃまで口の達者な可愛い子、二十四ワードの人気者。

「ジョニー、行っちゃったよ!」

と、クレラは森を指していう。

「ジョニー、ジョニー」

私は大声で森にむかって呼んでみたが、返事はなかった。子どもたちを芝生に坐らせ、私はクレラを背負い、森の近くまで探しに行った。が、ジョニーの姿は見えなかった。

十分待ち、二十分待ち、私たちはひたすらジョニーが森から帰るのを待ちつづけた。

子どもたちは芝生の上で遊んでいても、みんな神妙な表情をしていた。私の心配顔を読み取ったのだろう……。

そして、ついにジョニーが森の中からひょっこり姿をあらわした。満面に微笑みながら、ジョニーは私たちにむかって走ってきた。

彼の手には、黄色のタンポポの花がいっぱい握られていた。その花束を私の胸に押しつけて、ジョニーは、

「ユー、キーコ、キーコ」

と、ニコニコしながらいった。ジョニーのお尻をピシャリとたたきたかったけど、ジョニーの微笑は私の心をとろけさせてしまった。

「ありがとう、ジョニー。もう一人で森に行かないでね！」

私はジョニーのほっぺにキッスしながらいうと、ジョニーは一言「オーライ！」と元気の良い返事をした。

子どもたちは待ちくたびれていた。

ソバカス坊やのメルトンが私の体にまつわりついて離れない。私はメルトンの手を取り、ゲリーを引っぱるようにして歩きだした。

ワードに近づいたとき、突然、メルトンが私の手を振りきって正門にむかって走りだした。足の早いメルトンは私が呆気にとられてる間にも駆けていく。

私はハッとして、彼の後を追いはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com